

Profile

1977年仙台市生まれ。15歳でタップを始め、19歳で渡米。NYU心理学科に通いながら鍛錬を積み、NYタップフェスに9年連続出演。NYタイムズ等メディアに度々取り上げられ、VILLAGE VOICE誌では「日本のグレゴリー・ハインズ」と評される。'06年、米ダンスマガジンで「観るべきダンサー25人」に選出。現在は、NYと日本を二大拠点とし、日野皓正、coba、上原ひろみ、ハナレグミ、レフレルら多数の音楽家とも共演する唯一無二のアーティスト

「自分にしか出せない音を
観客と同じ空間で分かち合いたい」

アイルランド移民が木靴をカタカタ鳴らす足さばきと、黒人部族の伝統や儀式的リズムを表現したダンスを融合して生まれたタップダンス。古代ギリシャ、ローマ時代に起源があるクラシック音楽。異なる背景を持つ2つの芸術が、今夏、1つの舞台に乗る。「REVOLUCION」と題されたそのステージで、東京フィルハーモニー交響楽団が奏でる迫力の音とともに舞うのは、世界屈指のタップダンサー、熊谷和徳さん。未曾有のパフォーマンスを控えた今、彼はどんな心境なのだろう。

今からとても楽しみです」
数ヶ月前には、上演会場に足を運び、下見も兼ねて舞台を鑑賞してきたそう。
「舞台上に立った自分と観客が入った客席を思い描くとイメージが膨らみません。オケと合同のリハは本番直前しかできないので、イメージの中で舞台を作り上げていくことが大切。選曲に関して、実際にその会場に行くことで、こんな曲が合うな」と頭に浮かんでいきますし」
そう。「REVOLUCION」で使われる楽曲は、大半が熊谷さん自身の選曲。バツバ作曲『チェンバロ協奏曲第一番』からカタルーニャ民謡『鳥の歌』までの幅広いラインナップを見る限り、相応な通なのかと思いきや、意外にも出

合ったばかりの曲も多いのだとか。
「今回は、柳田邦男さんの著作『いつも心に音楽が流れていた』で紹介されている楽曲をいくつか披露する予定です。この本は柳田さんご自身から頂いたのですが、一つひとつの曲にまつわるストーリーや背景が気に入って、ダンスでそれを表現したいと思ったんです。公演タイトルの『REVOLUCION』も、実は本書で出合ったシヨスタコーヴィチの『革命』から拝借しました」
ダンサーにとって、未知の曲との出合いは創作の源となる。そこから得たひらめきをリズムに昇華させ、自分だけの音を見つけることができるのだ。独自の音を持つことの大切さ—これは、熊谷さんが子どもたちにダンスを教える際に最も重視していること。

「言葉での表現が苦手な子も、踊ることと、今まで自分でもコントロールできなかったエネルギーを自由に使い、感情を表現できるようにするんです。そういう子たちが、ステージで自分をめいっぱい表現して観客を沸かせ、自らも観客から何かを得ている姿を目の当たりにすると、こちらもうれしくなります」
そう話す熊谷さん自身、舞台上に立つたびに、観客と一緒に作り上げていく空間から、多くの感動や刺激を得ているそう。
「生の良さ。って、映像になると伝わらないなとつくづく思います。今回の舞台でも、そこにある二オイや音の振動、空気感をお客さんと一緒に共有したいです」

取材：文／松本玲子 写真／堀内慎祐

熊谷和徳×東京フィルハーモニー交響楽団
「REVOLUCION」
2010年8月31日(火)
開場 19:00 / 開演 19:30
東京オペラシティコンサートホール
☎0570-00-3337
<http://www.revolucion2010.info/>

